

藤井誠二著

中国的名言を
4コマ漫画にしてみた

《明治書院、二〇二二年一月、一四三頁》

つくづく中国は言葉の国であり、そこに生きてきた人々は修辭の民であると思う。日々の営みの中で生起し、対立を招いてしまうような様々な矛盾であろうが、論理ではなく言葉が秘めた曖昧模糊とした感性によって丸く収めてしまう。有史以来、激動の歴史を歩んできた民族が生んだ知恵というものであろうか。

たとえば互いに譲らず対立する二人の間に立って、双方の言い分を聞き、双方が納得できるような解決策を打ち出すことは容易ではない。どちらかに、あるいは双方に不満が残ることは人の世の常だ。だが、そこで双方に向かつて《君子は和して同ぜず、小人は同じて和せず》と持ち出せば、余ほどのへソ曲がりでない限り、周囲から

「君子」として見られたいはず。そこで嫌でも「君子」として振舞うことになるだろう。かくて対立は「回帰不能点」を超えることなく、双方共に不満を残しながらも納得することになる。まさに中国的名言のマジックだ。

この本は、日本でも日常的に使われている中国的名言を集め、その出典を示しながら4コマ漫画で表現している。同じような本は書店の店頭でも見受けられるが、この本が他と大きく違う点は、①著者が著名な漫画家ではない。②それゆえ、お世辞にもウマイ漫画とはいえない。③にもかかわらず、表現された4コマが不思議な説得力を持つている。いいかえるならヘタ・ウマの魅力に溢れていることだ。これだけでも一読の価値あり、である。

「現在二十七歳です。高校を出た後四年間、一日も休まず自宅を警備していました」と自己紹介する著者は、じつは我が愛知大学現代中国学部現役生（本書出版時）であり、「あまりの成績の良さに、通常より二年長く在学する

特別待遇が決まりました（現在、その一年目）」と呟く。ならば、やはり《臥薪嘗胆》の日々を送ることの愉しさ知る《大器晩成》タイプだと見た。

くわえて「とても腹黒い理由で応募した出版企画コンテストで、何かの間違いで入賞し、神様の手違いにより、出版まで決まってしまった」そうだから、《禍転じて福となす》を実現させた幸運児かも知れない。いやいや、《人を射んと欲すれば、先ず馬を射よ》を見事に実践し、登竜門を登りつつあるともいえそうだ。あるいは世間に向かつて、心秘かに《王侯将相いざくんぞ種あらんや》を念じ、《燕雀いざくんぞ、鴻鵠の志を知らんや》などと嘯いていたようにも考えられる。

今後は《百里を行くも者は九十を半ばとす》を常に心がけ、精進を重ね、《出藍の誉》を実現されんことを、愛知大学現代中国学部教員の一人として切望しておきたい。同時に著者にお願したいのだが……。

(樋泉克夫)